

A年復活節第4主日 ヨハネ10章1-10節

〔直訳〕

- 1 「まことに まことに 私は言う あなたがたに、
入らない者は **門**を通じて 羊たちの囲いの中へ
しかし 上る者は 別の場所から
その者は 盗人で ある そして 強盗で。
2 **だが**入る者は **門**を通じて 羊飼いで ある 羊たちの。
3 この者に 門番は 開ける、
4 そして 羊たちは 彼の声に 聞く
そして 自分の 羊たちに 彼は声をかける 名指しで
そして 彼は導き出す 彼らを。
5 ときは 自分の すべてのものを 彼が連れ出す、
彼らの前に 彼は行く、
そして 羊たちは 彼に 従う、
6 というのは 彼らは知っている 彼の声を。
7 **だが**よそ者に 決して 彼らは従わない、
8 しかし 彼らは逃げ出すだろう 彼から、
9 というのは 彼らは知っていない よそ者たちの 声を。」
10 この たとえを 語った 彼らに イエスは、
だがその者たちは 分からなかった
何で あったか ところのことは 彼が語っていた 彼らに。
7 それで言った 再び イエスは、
「まことに まことに 私は言う あなたがたに 次のことを
8 私は ある **門**で 羊たちの。
9 者は皆 ところの 来た 「私の前に」
10 盗人で ある そして 強盗で、
11 しかし 聞かなかった 彼らに 羊たちは。
12 私は ある **門**で。
13 私を通って もし 誰かが 入るなら
14 彼は救われるだろう
15 そして 彼は入るだろう そして 彼は出るだろう
16 そして 牧草を 彼は見いだすだろう。
17 盗人は 来ない
18 ようにと以外は 彼が盗む そして 彼が殺す そして 彼が減ぼす。
19 私は 来た
20 ようにと 命を 彼らが持つ そして 溢れるほどに 彼らが持つ」。

〔新共同訳〕

1 「はつきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。 2 門から入る者が羊飼いである。 3 門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。 4 自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。 5 しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」 6 イエスは、このたとえをフアリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。 7 イエスはまた言われた。「はつきり言っておく。わたしは羊の門である。 8 わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。 9 わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。 10 盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」

①ヨハネ10章の構成

ヨハネ10章では、合計四つのたとえが語られている。

- (1) 「門」のたとえ（1―3 a節）
- (2) 「羊飼い」のたとえ（3 b―5節）
（6節にヨハネによる説明文）
- (3) 「私は門である」（7―10節）
- (4) 「私は良い羊飼いである」（11―18節）
（19節にヨハネによる説明文）

(1)と(3)はイエスを「門」にたとえており、(2)と(4)はイエスを「羊飼い」に見立てている。しかし、(3)と(4)では「私は…である」という荘厳な自己宣言が使われる点で、(1)や(2)とは異なっている。

②10章1―10節の構成

①第一段落（1―3 a節）

⑦この段落では、2節の「だが」によって、「門を通って入らず、別の場所から上る者」と「門を通って入る者」とが対比される。羊の囲いに入る者が「盗人や強盗」なのか、それとも「羊飼い」なのか、それを見分けるポイントは「門を通って」入るか、入らないかにある。

②第二段落（3 b―5節）

⑦この段落でも5節の「だが」によって、真の羊飼いと偽者とが対比される。しかも、この段落の主語に注目すると、キアスムス（交差配列法）が用いられているのが分かる。

- 「羊たち」は羊飼いの声を聞く（a）
- 「羊飼い」は羊を導き出す（b）
- 「羊飼い」は羊の前に行く（b'）
- 「羊たち」はよそ者には従わない（a'）

「羊↓羊飼い↓羊飼い↓羊」と展開させることによって、羊と羊飼いの親密さが明確に描き出される。羊がよそ者に従わないのは「声」を知らないからである。「声」と「従う」を繰り返すこ

とによって、イエスに「聞き従う」者の特徴が明らかにされる。

◎第三段落（7―10節）

⑦この段落が1―3 a節と同じように「門」をテーマとしているのは明らかである。というのは、7節に「私は羊たちの門である」とあり、さらに9節にも「私は門である」と繰り返されているからである。

①2節と5節に「だが」が置かれ、真の羊飼いと偽者が対比されていたが、この段落では、10節に繰り返された「ように」とによって、盗人の目的とイエスの目的が対比される。盗人は「盗み、殺し、滅ぼすように」とやって来るが、イエスは羊が「命を持ち、溢れるほど持つように」と来た。羊に求められていることは、「門」を見つめ続け、聞き覚えのある声に聞き従うことである。

③声を知っている（1―6節）

①1―5節では、「門」のたとえと「羊飼い」のたとえが組み合わされている。1―3 a節の「門」のたとえでは、7―10節と同様にイエスが「門」にたとえられる。門以外の「別の場所」から羊のもとに入る者は「盗人や強盗」である。「だが」、門を通って入る者は羊飼いであり、その者には門が開けられ、中に入ることができる。3 b―5節の「羊飼い」のたとえでは、11節以下と同様にイエスが「羊飼い」にたとえられている。羊は羊飼いの声を知っているので、彼に従って囲いの外へ出て行く。「だが」、よそ者には従おうとはしない。羊はその声を知らないからである。

⑥6節の「たとえ（パロイミア）」は「道端の」を意味する語から派生した語で、元は「道端で語られる、人生に有用な言葉」あるいは「普通とは異なる言い方」を意味していたと考えられる。新約聖書では、ヨハネに三回（こと一六25・29）のほかは、2ペトロ2章22節に用いられるだけである。2ペトロ2章22節では、「ことわざ・格言」の意味で用いられているが、ヨハネでは特異な意味が込められているようである。ヨハネ16章25・29節では、この語は「はっきり話されたこと」と対比されており、「一種の謎を秘めた言葉」という意味で用いられているからである。信じる人々には意味が開かれていても、信じない人々には不可解な謎として残る言葉という意味で用いられている。

③「このたとえを彼らにイエスは語った」とあるが、この「彼ら」は9章40節に登場するファリサイ派の人々である。彼らはイエスのたとえの意味が分からない。1―5節の「門」のたとえと「羊飼い」のたとえはヨハネ9章の「生まれつき目の見えない人のいやし」と関連している。9章24節以下で、ユダヤ人たちはいやされた人に「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ」と忠告するが、彼はこれには耳を貸さず、「イエスは神から来た人」と告白して、イエスに従う。イエスの声を知る羊は、よそ者には従わず、イエスに従う。いやされた人は、イエスの声を知っている羊を表す実例である。

④羊たちは聞かない（7―10節）

①7節一行目に「それで再びイエスは言った」とある。「再び」という語は話題が新たに始まることを示している（ヨハ8・21参照）。ここでは、1―5節のたとえを踏まえた上で、7節から新たな内容を加えて、話が展開されていく。

①1―5節の二つのたとえとは違って、7―18節の二つのたとえ（7―10節と11―18節）は、

「私は門である」（7節）、「私は良い羊飼いである」（11節）という宣言で始まっている。「私は…である」は特にヨハネによく見られる言い回しで、イエスが果たす役割を示す表現であり、イエスが誰であるかを示している。

③ イエスは自分が「門」であることを公に宣言する。この「門」は、1―3 a節に示されていたように、羊に接近する者が盗人か否かを見分けるためのしるしになる。8節にあるように、盗人は来たが、羊たちは彼らに「聞かなかった」。ちょうどそれは、ユダヤ人の忠告に耳を貸さなかつたいやされた人のようである（九24以下）。

④ 10節の「ない：以外は」という言い回しは「ただ：だけ」を意味する。盗人がやって来る目的は、ただ「盗み、殺し、滅ぼす」ことだけにある。盗人が羊の命を盗んで、滅ぼすためにやって来ても、「聞かない」ということがあれば、羊は命を保つことができる。

⑤ イエスは9節でもう一度「私は門である」と宣言して、イエスが救いへの「門」でもあることを明らかにする。羊が盗人の話を「聞かない」で、この門を出入りするならば、囲いの外に牧草を見つけることができる。この「門」は命を溢れるほどに与える門である。盗人の目的は「盗み、殺し、滅ぼす」ことであるが、イエスは羊が「命を溢れるほど持つ」ために来た。イエスこそ命を豊かに与える本物のメシアである。「溢れるほどに」は、人間の狭量さに対する神の寛大さを表す。ヨハネはこの主題をよく用いる。「溢れ出す水・泉」（四14）、「永遠に飢えさせないパン」（六35・50・58）を参照。

⑥ 7節の「門」は、イエス以前に来たけれども、羊が聞くことのなかった「盗人や強盗」との関わりで述べられている。この「盗人や強盗」とはイエスの敵対者や偽メシアのことを指すのだろう。イエスは偽メシアを見分けるための「門」である。9節での「門」はそれを通る者が救われる門であり、出入りして牧草を見いだすための門である。このように、「門」は二重の機能を果たす。門の中にいる羊にとって、真の羊飼いとそうでない者とを識別するためのしるしであり、同時に、そこを通過して、豊かな牧草地へと導かれるための通路でもある。

⑦ 門であるイエスを通して「入る」なら、その人は救われる。「入る」はヨハネ3章5節で「神の国に入る」と述べるときと同じ動詞である。ここには行き先が書かれていないが、やはり「神の国」が考えられているのだろう。「牧草を見いだすだろう」は、ここでは「救い」を表している。このイメージは旧約聖書にも見られる（代上四40、詩二三2、エゼ三四12―15、イザ四九9以下を参照）。

⑤ 聞き従うべき声を知る

⑧ ヨハネ福音書が書かれた時代の教会は、ファリサイ派に代表されるユダヤ教と対立関係にあった。ユダヤ教からの攻撃にさらされている教会が聞き従うべき声を知らないでいれば、滅ぼすためにやって来る盗人の手に落ちてしまう。イエスはそのような教会に向けて、「まことに、まことに私は言う」と繰り返し述べ、羊は盗人の声に耳を貸さず、従わないはずだと繰り返し述べている。イエスは羊のために命を捨てた良い羊飼いであり、その言葉に従うとき、命が豊かにされる。

⑨ イエスによって羊が「溢れるほど持つ」命とは、11―18節の「良い羊飼いのたとえが語るように、イエスの死によって現れる命、復活の命である。イエスは父の思いに従って命を差し出し、神から新たな命を与えられる。生まれつき目の見えなかった人がイエスによっていやされ、神の業を身に受けたように、イエスの声に聞き従い、神の力を受けて生きるようにと呼びかけられている。